

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

「我、日本のマルコ・ポーロとならん」

自転車単独走破した14480km——影山淳著 (東京新聞刊)

2003年7月26日午前12時ジャスト、還暦を間近に控えたひとりの日本男児が、地中海に面したトルコ・ライアスの港町を後に、はるか北京めざして愛車のペダルを踏み込んだ。・・・東京新聞出版局から12月19日標題の本が出版された。

世界ではじめて自転車でマルコ・ポーロの足跡をたどった一人の日本人がいる。影山淳さんがその人だ。影山さんは名古屋山岳会に所属しているが、長野県山岳協会とも関係が深く、1976年の日本・イラン合同マナスル登山隊のメンバーとしてサミッターとなった。2009年、元長山協会長でこのマナスル隊の隊長を務めた田村宣紀さんの著書「登山の知恵」が中国語に翻訳出版された際に、中国武漢で行なわれた記念祝賀会に小生も出席させていただいた。その時の詳細はかわらばん333号から337号〔2009年11月から12月〕に記載してあるのでそちらを参照されたいが、当時仕事で中国上海にいた影山さんもその会に参加され、以来親しくお付き合いいただいている。その祝賀会の折、当時はまだ進行中であったこのシルクロード単独自転車走破という偉業を耳にした。

その影山さんがこのほど、その世紀の偉業を東京新聞出版局から一冊の本として著した。曰く「我、日本のマルコ・ポーロとならん——自転車で単独走破したシルクロード14480km」。その出版記念祝賀会が24日土曜日、影山さんの出身地の静岡県掛川市で行なわれた。当日は影山さんの幼なじみの方をはじめ名古屋山岳会の山仲間の方々、また職場の方々など多くの方がその出版をお祝いした。不肖小生もその祝賀会にお招きいただき、出席させていただいた。その会には、アフガンとタジクの国境地帯で最後の秘境といわれる「ワハーン回廊」研究の第一人者の平居剛さんや今夏オートバイで世界一周をした佐藤繁さんもお祝いに駆けつけ楽しい会であった。

さて、肝心の本の紹介をしよう。影山さんは「一流の登山家は一流のビジネスマンでもある」を実践する尊敬すべき登山家である。したがって、今回の14480kmの走破もその延長上にあることが僕はまず第1に凄いことだと思う。影山さんはこの偉業を、会社の仕事を続けながら、夏の休暇を使って少しずつ繋ぎ8年間かけて成し遂げた。「夢」を現実にした執念はすばらしい。しかし決して順調に事は運ばない。トルコ、イランと人々のあたたかさに触れて順調に進んだ影山さんだったが、続く「アフガン」に入るにあたって大きな壁となって立ちはだかったのが政治的な問題だった。正攻法でタジキスタン側から入国しようとして、日本政府の外交下手、状況判断能力のなさにぶつかっただりや、どうしても入れなかったタリバーン占拠地域のくだりなどは、その無念ぶりが胸をうつ。

それにしても、影山さんのマルコ・ポーロへの心酔ぶりと「東方見聞録」に対する丹念な読み込みぶりには驚かされる。研究者の間でもまだマルコがどこを通ったのか定説のない場所についても推定をし、現地の様子とマルコの記述を照らし合わせ、事実に基づ

いた裏付けを試みている。途中何回も表れる「マルコは確かにここを通っている」という記述は、単なる思い込みではない。実際に目で見て確かめた者だから言えるのだ。マルコの記述ももとにした入念なルート検討と現地で次々と現れる困難や危機への対処、また現地の人々に対する観察眼にも脱帽だ。中国に入ってからからの記述は今年僕が経験した事ともバッチリ一致して興味深かった。雨のタクラマカン砂漠の記述（やっぱり最近砂漠は雨が多いのです）、ホテルに泊まるたびに公安にパスポートを持って行かれる話、中国の舗装道路の謎などなど。

「シルクロードを踏破」一口でいうのは簡単だが、炎熱のイランの砂漠、人っ子一人いない大地……。味わいのある文章と影山さんの絵にも大注目。ぜひ全国の店頭で手にとってご覧下さい。HP <http://www4.tokai.or.jp/junkage/>にも注目ですよ。

ヤスィックアゲルの蒼い空 28

最終章、帰国

こうして長かった遠征もいよいよ終わりを迎えた。最後の晩は、ヌルさんの息子さんも交えて最後の夕食を楽しんだ。ヌルさんの息子さんは現在トルコへ留学中だが、夏休みで帰ってきたそうだ。何でも映画監督になりたいと勉強をしているとのこと。英語も堪能で、意思疎通も可能である。最も僕の方の英語はかなり怪しいので片言英語になってしまったのは、いつものことながら残念だ。父親と過ごせる夏休みを楽しみにしてきたのに、その父親を我々が奪ってしまった。申し訳ないがヌルさんは僕らにとってなくてはならない人だった。そんな感謝を伝えながら、楽しく食事をした。

ラマダン中の夜の食堂は、家族や友人がみんな集って団欒をする場となっており、大変な活況であった。日没とともに断食が解禁になると、彼らはコーランの一節を唱えお祈りをし、その後まず大地の恵みに感謝してスイカやハミ瓜などの果物を口にして喉の渇きを癒す。時には聖地メッカのそばでとれるナツメを食することもある。その後、談笑をしながらゆっくりと時間をかけて一日分の食事をする。シシカバブ、ラグ麺をはじめ、大皿に盛られた数々の料理が次々とテーブルに並ぶ。ABCより上部での登山活動中は別にして食べ続けてきたウイグル料理とも今日でお別れである。今度ウイグルにくるのはいつのことだろうか。

食事を終えて、いったんホテルへ戻ったあと、隊員全員に声をかけて町中の屋台へ繰り出した。さすがに腹は一杯で固形の食べ物はのどを通らなかったが、屋台の雰囲気を楽しむながら最後の夜を一杯5元の生ビールで締めくくった。最後の晩を隊員みんな堪能し、明朝の準備を終えて寝たのは午前2時を回っていた。

8月20日は朝6:15に目覚めた。食事を済ませ、ウルムチ空港に向かう。良き仲間とともに本当にいい登山ができた。その裏方として終始お手伝いをしてくれたヌルさんともお別れである。チェックインを終え、ボディ検査、僕らが待合室に消える最後の最後までそのヌルさんが見送ってくれていた。

・・・飛行機は定刻を大幅に遅れて10:10にテイクオフ、北京での乗り換えを経て、夜20:42我々は35日ぶりに、途中リアタイヤした山内君と三戸呂君の両親が待つ名古屋セントレア空港に戻ってきた。

ありがとう、良き仲間たちよ。そして、職場の皆さん、生徒を始めとする応援してくれたすべての方々に改めてお礼を申し上げます。また、かわらばんにも長いことおつきあいいただきありがとうございます。来る年が良き年でありますように。(了)